
「新鮮組」それは俺のロマン

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「新鮮組」それは俺のロマン

【Nコード】

N1467G

【作者名】

kajji

【あらすじ】

俺は金田君と池田屋を攻めるために「新鮮組」結成することにした。

題一話結集「新鮮組」

俺は常々思っていたなぜ明治維新に立ち合えなかったのかと。

俺も池田屋に攻め込みたい。なぜその時に俺がいなかったのか。そう思った俺はこのことを親

友の金田君に相談した。

「うん。じゃあ。僕たちで「新鮮組」を結成して池田屋に攻め込みましょう！」

彼は力強く宣言した。彼はメガネ君で、頭がおかつぱで背が低くてやせっぽちの目立たない人

間だった。彼は俺が知っている中でこのときが一番輝いていた。

俺たちは「新鮮組」を結成した。俺が局長で、金田君が副長つまり土方役をやることになった。

そのためにはメンバーが必要だろう。金田君と相談したところやはり沖田役の人間が必要じゃな

いかということになった。沖田という人物は「新鮮組」の一番隊長でありその剣の腕のみならず

かっこいい容姿だったという。確かにビジュアル面も確保しておいたほうがいいだろうから俺た

ちは沖田柾を埋めるために協議することにした。

「まあその柾は俺が兼任してもいいが、確かにもう一人いてもいいかもしれないな」

「……。早急に探しましょう」

金田君は急に焦りだした。なんでだろうか。

俺たちは沖田役の人間を探すことにした。金田君が当てがあるというので付いていくことにした。

「あの人ですよ。窓際の後ろの方で話している人です」

金田君の指の先に二、三人の男がいるのが見えた。その中で一際目立っている男がいた。茶色の長髪、目元はきりつとしていて、顔立ちは恐ろしいほど整っていた。そして、なぜか胸元

ははだけていた。

「うわ。ちゃらいなあ」

「まあちゃらいですけど、僕が知っている中では彼が一番沖田役にふさわしいと思います」

金田君は誇らしげに語った。なんでお前がそんな誇らしげなんだよ。

「仕方ない。俺には劣るがあいつで行こう。ちなみに名前はなんて言うんだ」

「岡崎勇一というそうです。名前はちゃらくないです」

「なるほどね。岡崎勇一か。確かにちゃらくはないな」

俺にはやつを引き入れる秘策があった。一発であいつを手に入れる秘策が。俺は助走を着けて走り出した。

「おかざきいいー」

ボフ

俺はやつの脳天を揺らしてやった。ハンサム岡崎は地面に崩れ落ちた。

「悪いがハンサム岡崎は借りて行くぞ。金田。こいつを連れて行け」

周りの連中はあまりの出来事に呆然としていた。

こうして俺たちの仲間にハンサム岡崎が加わった。

もう一人、斉藤一の枠には左利きの木村君が加わった。金田ファミリーの一人なので強引に仲間に入れた。理由は左利きだからそれだけだ。

こうしてついに現代における「新鮮組」が成立した。四人という人数だが正直もう集めるのが面倒なのでこの人数で行くことにした。これから池田屋に攻め込むことになったのだが、ここで問題が

起こった。

「お、俺をどうするつもりだ」

沖田梓のハンサム岡崎が意識を取り戻して、暴れ出したからだ。

「だからさっきから言ってるだろ。これから俺たちは池田屋を攻めに行くんだよ」

「なんで俺がそんなことしなければならない」

「いいか。よく聞け。俺たちは沖田梓がどうしても欲しかった。そのためにお前のハンサムフェイスがどうしても欲しかったそれだ

けだ！」

「意味がわからない。それに俺はこれからデートなんだお前たちのイカレタ考えには付いて行けない」

ハンサム岡崎は期待通りにちゃらい一言を言って俺たちから離れて行くとした。

「局長。ここは私にお任せください」

金田君改め土方君が自信ありげに言い出した。なぜかこいつ今日は自信満々だ。

「わかった。任せよう。何か策があるみたいだな」

「ありがとうございます。私にお任せください」

そういつと金田君はハンサム岡崎君に近づいてそつと耳打ちした。そうすると金田君は顔を青ざめさせて、何やら金田君と口論し

ていた。しばらくするとこちらに二人で近づいてきた。

「局長。岡崎君がぜひお手伝いしたいそうです」

「そうか。やはりそうだと思った。私の目に狂いはなかったな」

金田君が何をしたのか気になったが突っ込んだら負けだと悟った自分は何も聞かないことにした。

「よろ……しくおねがいします」

なぜかハンサム岡崎はがつくりと気を落としていたが、まあとにかくメンバーが全てそろった。後は目指すは池田屋だ。

題二話I K E D A Y A

「ここだな」

俺たちが向かったのは「喫茶I K E D A Y A」不良たちが集まると噂の場所だ。ちなみにこれは

副長の金田君情報だ。

「よし。皆の衆。入るぞ」

みんなの意思を確認して入ることにした。見たところ普通の喫茶店のようだが、ドアの前に掛け

てある看板に今日のお勧め店長の気まぐれランチと書いてあった。

からんからーん

「いらっしゃいませ」

中はそんなに広くはなかった。テーブル席が5つほどと、カウンタ―があるだけだった。カウン

ターにはひげ面の店長がいた。

「とりあえずどこかに座りましょう」

俺たちは窓際の席に座った。俺は周りを見てみた。客は一組だけだった。いかにもガラの悪そう

な学生たちが七人ほどいた。

「あれか。噂の不良というのは」

「どうでもいいから帰りたい」

ハンサム岡崎君はテーブルに肘をついて憂鬱そうな顔をしていた。

「いらっしやい」

ひげ面の店長が水をもってやってきた。

「イチゴパフェ四つだ」

「はい？」

「イチゴぱふえ四つだと言っている。何回も言わせるでない」

「ああ。はい。はい。かしこまりました。少々お待ちください」

ひげ店長は複雑な顔をして奥に引っ込んでいった。なんて失礼なやつだ。

「なんでイチゴパフェなんて頼みやがるんだ。お前。どうかしてるんじゃないか」

「うるさいぞ。思わず頼んでしまったのだ」

「思わずならコーヒーとかだろ。頭の構造おかしいんじゃないのか」

「喧嘩はやめましょう。これでは僕たちは何しに来たんだかわからないじゃないですか」

とりあえずここは金田君に免じて許してやることにした。

「では。奥にいるやつらの様子を見ようではないか。みんな会話に集中しよう」

俺たちは奥の不良たちの会話に耳を澄ませた。

……。

「俺さあ。校長の大事にしてる花壇踏んでやりましたわ」

「き、聞きましたか！ さ」

バシィ

「副長。うるさい。静かにしないか。それと俺は局長だ。間違えるな」

「い。ごめん局長。今度こそ気をつけるから」

俺たちは再び彼らの会話に耳を澄ませることにした。

……。

「あほか。俺の方がすげって教頭の予備のカツラに取り扱い注意のシール張ってやったつうの」

「さ」

ガツウ

「だから局長だと言ってるでないか。本名で呼ぶでない。晒されたらどう責任取るつもりである

う」

「ご。ごめん局長。今度こそ気をつけるから」

俺たちは再び彼らの会話に耳を澄ませることにした。

……。

「お前らさあ。大したことなくねえ。俺の方がマジすげって。聞い

て驚くなよな。俺さあ。選挙

のポスターあんじゃん。あれに落書きしてやったわ。髭とか描いてさあ。マジでアートだわ。俺

すげくねえ」

「ゆ……許すまじ！あの不良どもがあ。今こそ立ち上がろうでないか。行くぞお前ら」

「さ。いや局長落ち着きましょう。焦ってもいいことはありませんよ」

金田君改め副長は俺が立ち上がる所を抑えて止めた。俺はイラッときたが副長の言うことはもっ

ともだと思ったので再び着席した。

「おまちどうさま」

ひげ店長がタイミングよくイチゴパフェを持ってきた。普通のサイズだった。なかなかうまそう

だ。

「とりあえず。パフェを食べましょう。せつかく頼んだんですから」

「俺さあ。甘いのがあんまり得意でないんだけどねえ。まあ食べるかあ」

ハンサム岡崎は渋そうな顔をしてパフェを食べ始めた。結局は食べ

るんだな。こいつは。

「まず。彼らは予想通りの不良だ。しかも世間様に多大な迷惑をかけているのだ。これは我々で

天誅を下すしかないのではないか」

「まあ。確かに迷惑は掛けてんのかも知らないね。天誅下すとかそんなんはわからないけどさ」

岡崎君も概ね同意しているみたいだった。副長はうんうんと頷いていた。木村君はどうでもいい

として、さあどうしますか。

俺はある案を思いついた。

「では。ミスターハンサム岡崎。俺たちはこれからどうしたらいいと思うかね。下の選択肢から

選んでくれたまえ」

俺は全てを沖田梓の岡崎君に委ねることにした。

「って。何で俺なの？ あと俺のことハンサムとか呼ぶのやめてくれない？ うわ。なんか選択

肢出てきたじゃんか」

「全ては君に懸かっている頼んだぞ。一番隊隊長！」

「マジかよ。あー。わかった。そんじゃあなあ」

一番隊隊長は観念したらしくどうするか考え出した。

ご希望の選択肢へどうぞ

- 一、 正面から堂々と不良たちと対峙する（題三話へ、Aコース）
- 二、 知らん振りをする（題四話へ、Bコース）
- 三、 チャンスを窺う（題五話へ、Cコース）

題二話 I K E D A Y A (後書き)

これは実験的書かせていただいたものでこれはネットで公開しているのか躊躇いました。思い切って投稿させていただきました。こんなもの小説でもなんでもないと。できれば自由に意見をいけたらうれしいです。ご拝読ありがとうございました。

題三話Aコース

「ここはやっぱ男らしく正面から行くしかないでしょ」

岡崎君は力強く言い出した。

「よし。それでは正面から叩き潰すぞ。その前に副長。会計は済ませておいてくれ」

副長金田君は不思議そうな顔をしていたが素直に会計を済ませた。すまぬな必ず後で払うから

な。

「俺に続けえ」

俺たちは立ち上がり不良たちの所へと向かった。不良たちは皆、髪を茶色に染め、ピアスをし、

ブレザーではあったがダボダボに着ていた。

彼らは俺たちに向けて敵意の視線を向けてきた。腐った魚のような視線だ。正直俺は怖かつ

た。

「なんだあ。お前らあ」

タラコ唇の男が言った。

俺は恐怖を抑えつけ言った。

「お前らの悪行は聞かせてもらった。我々は「新鮮組」である。京の治安乱すものは許さん。成

敗してくれる」

俺は予め確保しておいた胡椒を不良たちにぶちまけた。そして、不良たちが怯んだ所に一番近く

にいた出っ歯の不良に殴りかかった。

ボフウ

確かな手応えを俺は感じた。

「よし、逃げるぞ。撤退だ」

「え？」

副長以下は驚きの声をあげた。

「待てや。お前ら」

不良たちの叫びが聞こえたような気がしたが俺たちは無視して走った。俺たちは風になった。

走って走って走りまくった。

「よ。よし。ここまでくればいいだろ」

俺たちは公園で休むことにした。

「しかし、なぜ逃げたんでしょうか」

副長が聞いてきた。

「いや。あのまま戦闘を続けたらお店の迷惑になるではないか。かつての池田屋では暴れまくっ

てお店を傷を付けたではないか。私はそれを回避するためにあえて、適当な所で引き上げて来た

のだよ」

俺はそう言つとなんだか副長の顔が青ざめているように見えた。

「どうした。金田君。いや副長よ。青い顔などしちゃって流れ胡椒にでも当たったか」

副長は俺に向けて指を向けてきた。俺には何もついてないぞ。まったくどうした。

「う。後ろ……」

「ん。後ろだと」

振り返って見るとさっきの不良たちがいた。

「あれま」

なんと先ほどの不良たちがいたのであった。

「じゃあここでなら俺たちと思いつきり相手してもらえるんだな」

凹

「……」

それから後の記憶はなかった。

これが池田屋事件の終焉であった。

ジ・エンド

題四話Bコース

「今回は見送ろうぜ。絶対やばいって死ぬってマジで」

ハンサム岡崎は焦りながら言い出した。

「確かに相手は思ったより多そうだ。今日は様子見ということにしようではないか」

「局長、それでよろしいのですか？私は納得できません」

副長が非難の声をあげてきた。

「ああ。言った通りだ。今日は様子見にする。慎重に行った方がいい」

副長は納得言っていないようだった。明らかに不満そうだった。

「仕方ないであろう。相手は我々よりも遥かに多い。策も無く飛び込むのは丸腰で虎の穴に飛び込むようなものだぞ」

「し、しかし、ですね」

副長は尚も噛み付いてきた。副長にしては珍しかった。それだけこのIKE DAYA襲撃に掛けていたのか。不憫なやつめ。

「とにかく今日は待つんだ。必ず機会を設けて再度襲撃をするつもりだ！」

少し語尾をあげて威圧するように俺は言った。

「わ。わかりました。さ……。局長がそう言うのでしたら従うことにします」

副長はしぶしぶ引き下がった。

「そうか。そうか。副長ならわかってくれると信じていたよ」

俺たちはそういうことにして自分たちを納得させることにした。

「おまちどうさま」

ひげ店長がパフェを運んできた。

「今日は新鮮組結成の親睦会としよう。皆でパフェでも突こうではないか」

俺たちはパフェで舌鼓をし、大いに語り合った。その後俺たちは再び結集を誓って解散した。

俺たちは結果、悪を野放しすることになった。その後再び新鮮組を結成することはなかった。

ジ・エンド

題五話Cコース

「あいつらが隙を見せるまで待とうぜ。ここまま突っ込んでも負けるだけじゃねえか？」

ハンサム岡崎君は、目をギラつかせて言い出した。

「確かにあいつらは俺たちよりも人数が多い。隙を見せるまで待っていた方がいいのかも知れんな」

俺たちはパフェを食べつつ、辛抱強く待ち構えた。俺は思わずパフェのおかわりまでしてし

まった。だって、パフェうますぎるんだもの。

そして、ついにチャンスがやってきた。

「おい、今そこでジャクソンさんがロケしてるらしいぜ」

デコの不良が、興奮ぎみに言い出した。

「マジかよ。ジャクソンさんっていうと今ヒットチャートを爆走中の歌手だろ。マジ半端ねえ

な。おし、俺らも見に行くべ」

ひげの不良がなぜか説明口調に言い出した。

不良たちは店を出て行った。

「お、お客さん。待ってください。お代はどうするんですか」

ついでにひげ店長も慌てて不良たちを追って出て行った。一気にお店の中は誰もいなくなつた。

「来たぞ。神風だ。チャンス到来だあ！」

俺は絶好のチャンスに身震いした。

「みんな、塩だ。塩を持ってまいれ」

俺はみんなに塩を集めさせた。俺にはかねてから考えていた策があった。

「塩なんてどうするんですか」

副長は当然の疑問を言い出した。

「後で説明するから今は早く集めてくれ」

俺たちは全てのテーブルから塩を集めた。

「それでどうするのですか？」

再び副長は尋ねてきた。

「こつするのだ」

俺は塩の瓶の蓋を開けて不良たちの飲んでいたコーヒーの中に注ぎ

込んだ。

「ああ」

みんなから声が漏れた。

「ふふふ。塩コーヒーにしてやったぞ。これであいつらもおしまいだだな」

俺はあまりの決まりっぷりに身震いした。

「あな恐ろしや。局長あんたは鬼だ」

斉藤役の木村君は始めて喋った。

「よし。席に戻るぞ」

俺たちは席に戻ってパフェを食べた。一仕事した後のパフェは特にうまい。

程なくして不良たちは戻ってきた。

「あれは黒すぎるだろ」

不良メガネは言った。

「アイツぜってえ日サ口行ってるって」

黒い不良は言った。悔しそうだった。

彼らはそついつつ席についた。

「さて、撤退だ」

俺たちは会計をして外に出ることにした。

「うげえ。なんだこれ。マジでしょっぺえ」

「甘じよっぱ」

不良たちは悲鳴を上げていた。ざまあ見やがれ、悪は滅びたのだ。これが続に言う池田屋事件で

ある。きつと後世に語り継がれるであろう。副長頼んだぞ。

ジ・エンド 続くかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1467g/>

「新鮮組」それは俺のロマン

2010年10月10日21時20分発行